

## 故山本康正教授の急逝を悼む

安 藤 喜久雄

山本康正教授が平成8年8月半ばに福岡空港で倒れて入院し重体だと電話で知らされた時、ひたすら奇跡的に回復することを念じていた。しかし、残念ながら10日間足らずで亡くなられたとの訃報に接し、茫然自失となった。我に帰った時、本当にかげがえのない人を失ったという思いとともに、深い悲しみがこみあげてとまらなかった。

私自身、同教授とは本学着任時まで面識がなかったことから、人柄についてはよく知らなかった。着任以来、接触を重ね、一緒に仕事をしていく中にその人柄に魅せられ、それ以後、公私ともども頻繁に付き合うようになった。同教授の研究室に行くと、いつも自らコーヒーを入れ、菓子類を用意してくれる応待ぶりには感心するばかりだった。同教授は何事も親身になって相談ののってくれることもあって、私も甘えて何かにつけて助言や援助を仰ぐことが少なくなかった。同教授は本学に着任してから6年有余の短い期間であったが、嫌な顔一つせず文句も言わずに研究室の世話役を買って出、ひいてはまとめ役を引き受け、教職員の信望を得るようになった。また、温厚で熱心に学生の教育指導に当たり、面倒みの良い先生として学生諸君の人望を集めた。

同教授は家庭の事情で大学および大学院進学に際して一端就職を余儀なくされながら勉学断ち難く、間を置いて進学され、その後、米国に留学し博士号を取得した。このように苦勞して研究生活を送ってきたことが死後にわかり、そ

のような苦勞をおくびにも出さないところに同教授の奥床しきがあり、学生に暖く接する態度によくあらわれていたように思われる。

同教授は災害社会学を専門とする社会学者であるが、日本で数少ない人文社会科学系の災害研究者の一人である。本学に着任以来、偶然にも九州・熊本の普賢岳の大噴火をはじめ、日本各地で地震等による大きな災害が頻発した。平成7年1月には阪神大震災が起り甚大な被害を蒙ったことにより、災害に対する人びとの関心が強まったことは記憶に新しい。このような事情から、政府をはじめ各自治体や関係機関において防災に力を注ぐようになり、同教授は政府、自治体をはじめ各種の団体機関の委員として活躍する機会が日毎に増えていった。また、それと並行してテレビをはじめ各種のマスメディアが防災問題を取り上げることが多くなり、時代の寵児として東奔西走するようになった。今から考えてみると、このように各方面から引っ張りだこになって多忙を極めるあまり、知らず知らずの中に同教授の身心を蝕んでいったものと思われる。返す返すも残念でならない。

同教授は志半ばにして倒れられた。これまで数多くの調査研究や資料蒐集を行ない、その一部は論文として発表してきたが、単行本にして発表したいということを私に言われたことを憶えている。本学に着任して日が浅いが、教え子の中に災害研究を引き継いでやっている学生がおり、同教授の志を継いで研究を重ね、立派な研究成果をあげてくれることを信じてやまない。そのことがまた、同教授の願望であったとも思う。山本康正教授のご冥福を衷心より祈念する次第である。

## 故山本康正教授略歴

## 〈学歴〉

昭和39年4月～昭和43年3月	千葉大学文理学部
昭和49年4月～昭和51年3月	東京都立大学大学院社会学修士課程
昭和51年4月～昭和53年3月	東京都立大学大学院社会学博士課程
昭和53年　～昭和57年	米国オハイオ州立大学大学院社会学博士課程
昭和61年	社会学博士号取得（米国オハイオ州立大学）

## 〈職歴〉

昭和54年　～昭和57年	米国オハイオ州立大学災害調査研究所助手
昭和58年4月～昭和61年3月	東京造形大学専任講師
昭和61年4月～平成2年3月	帝京大学文学部社会学科助教授
平成2年4月～平成8年8月	駒澤大学文学部社会学科教授

## 〈主な公職歴〉

自治省・消防庁 災害調査専門委員  
 国連 地域防災連絡協議会委員  
 科学技術庁 国立防災科学技術センター客員研究員  
 京都大学 防災研究所客員助教授  
 東京消防庁 救急懇話会専門分科会委員  
 気象庁 気象審議会地震津波情報検討委員会委員  
 自治省・消防庁 南関東地域地震対策検討委員会委員

郵政省 防災通信ネットワーク検討委員会委員  
自治省・消防庁 地震防災対策検討会委員  
神戸市 復興審議会委員  
自治省・消防庁 市町村地域防災計画検討委員会委員  
東京都 防災会議地震部会専門委員  
神戸市 防災会議地震部会専門委員  
国土庁 中央防災会議専門委員  
自治省・消防庁 都道府県地域防災計画検討委員会委員

〈主な著書〉

『まちづくり読本』（八王子市コミュニティ振興会）  
『災害と人間行動』（東大出版会）  
『災害への社会科学的アプローチ』（新曜社）  
『自然災害の行動科学』（福村出版）  
『社会学への招待』（ミネルヴァ書房）